

～ 環境に関する社会貢献 ～

◇ 2007地球にやさしい作文・活動報告コンテスト <環境大臣賞>

デザイン・マンガ・ポスター部門中学生の部

岡地史瑛さん 14歳 (愛知教育大学附属名古屋中学校2年)



「自分の好きな絵を通して、環境保護を訴えることができました」と喜んでいました。ジグソーパズルをモチーフにした受賞作では、パズル片 (piece) と平和 (peace) を掛け、地球の平和を脅かす環境破壊をパズルが崩れていく様子に重ねて表現しています。舞台は北極。パズルの崩壊に気づく子グマが、何も出来ずに立ち尽くす姿が印象的です。「子グマよりもまず、鑑賞者である人間に環境破壊の深刻さに気づいてほしい」。岡地さんはそんな思いで筆を執りました。受賞を機に環境への意識が高まったという岡地さんは、「身近なところから環境保護に貢献したい」と、表情を引き締めていました。



受賞作品

※この記事、写真等は、読売新聞社の許諾を得て掲載しています。ヨミウリ・オンライン2008年3月1日付

◇ 森林環境を活かした心理教育相談室がオープン

教育実践総合センター心理教育相談室は、不登校やいじめなど教育に係わることを、「こころ」の視点や教育方法に関わるさまざまな視点から、専門的な相談をし、一緒に考えてゆきます。従来から地域で親しまれる相談室として活動しており、だれでも利用できます。

当相談室は、臨床心理士の資格をもった教員を中心とするスタッフによって運営されており、臨床心理士養成のための大学院生(臨床心理コース)の訓練機関も兼ねています。

従来は本学の中心部分にありましたが、洲原神社の森に囲まれ北門に近い落ち着いた場所に移転し、相談を受けやすい雰囲気をつくりました



完成した心理教育相談室

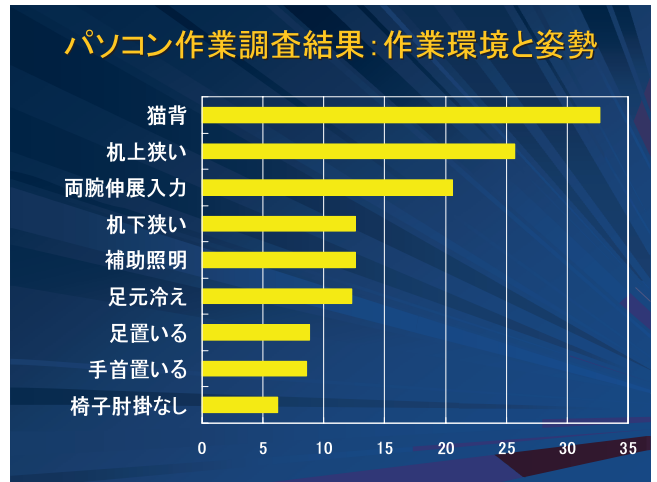
◇ 小堤西池カキツバタ群落の保全活動 (附属高校)

刈谷キャンパスのすぐ近くにある小堤西池は、大田の沢(京都)、岩美町の唐川(鳥取)と並ぶ日本三大カキツバタ自生地の一つとして広く知られており、昭和13年に国の天然記念物に指定されています。5月中旬からのカキツバタの見ごろには、まばゆい緑の湿原に映える清楚で雅やかな青紫色の花を楽しもうと多くの人々が訪れます。本学附属高校では「サタデーボランティア」と称して、地元住民の作る「井ヶ谷町かきつばたを守る会」や他のボランティア団体と協働して除草作業などを行っています。小堤西池はもともと水田かんがい用の池なので、オオミズゴケ、イソノキ、ヨシ、マコモ、ヒメコウホネ、ヒツジグサ、アンペライなどたくさんの種類の植物が繁茂しますが、自生カキツバタを保全するためには有害雑草の除去作業をしなければいけません。かまやくわを手にしたサタデーボランティアの参加者は、地元の方々とのふれあいを楽しみながら伸びた草と格闘しています。



◇労働安全衛生

教職員が、安全で健康に働ける職場作りは、充実した教育・研究活動の基礎です。2007年度には、パソコン作業の安全衛生に関する調査（図）やそれにもとづく改善、附属学校教員を含むメンタルヘルスや生活習慣病に係る相談などを、学内関係者が協力して実施しました。有害物へのばく露を防ぐために作業環境測定を実施していますが、2006年度に鋳金工房に局所排気装置が設置された結果、2007年度には、管理区分3（直ちに改善を要する）と判定された作業場はなくなりました。また、本学教育職員が責任者となった大学等環境安全協議会のプロジェクト「労働安全衛生改善事例の全国収集」の結果を総括し、事例のインターネットでの公開を準備しました。本事業は、2008年度も継続されます。2007年度の労働災害発生は5件で、内訳は休業災害1件（2日）、不休災害4件でした。労働災害度数率は0.77、強度率は0.0013で、2006年度の0.84、0.0014に比し、度数率は微減、強度率はほぼ同じでした。ちなみに本学の度数率、強度率は、2007年度の全産業の度数率1.83、強度率0.11に比べると低値です。労働災害の防止のために、災害の原因調査をし、その結果を掲示しています（写真）。また、再発防止策を講じています（写真）。学生は労働者ではありませんが、授業や卒業研究で教員と共に有害物を扱うことがあるため、有害物取り扱いと健康に関する調査をし、必要な健康保護措置を講じています。学生向けの有害物安全衛生マニュアルの作成にも着手しました。



捻挫事故後に表示された通路の段差注意



落下防止のため着色された屋外階段

蜂刺されに注意！

附属高校校舎裏にて蜂（アシナガバチ）に左手を刺されました。その後、意識が朦朧とし冷や汗・動悸・めまいの症状が現れ病院へ搬送されました。蜂に刺され、症状が現れるまで2〜3分。刺された方は10年ほど前にも1度蜂に刺された経験があったそうです。

◆蜂に刺されたら
痛みや腫れだけなら放っておいても大丈夫ですが、まずは保健医療センターに連絡をしてください。呼吸困難や昏倒、血圧低下などの重症時は、救急隊等、呼ぶ足したも度で救急車を呼んでください。
これらの症状はアナフィラキシーショックといって、場合によっては死亡することもあります。2回目は特に注意しましょう。アナフィラキシーショックは刺されてから30分以内で発症することがほとんどですから、ある程度時間が経過して異常がなければショック状態にはならないと考えていいでしょう。昔から、「アムモニアで腫れを中和するといふ」などと言ってオシロイを刺された部位に塗ったり、実際にアムモニアを塗ったりすることは、ほとんど無意味です。お気をつけください。
腫れをよく冷やし、安静にすることが大切です。もしショック状態を呈したら、患者を仰かせ、両腿（すね）を膝より高い位置に固定するなど、ショック状態をよって脳や内臓への血流を確保させてやる工夫も必要。

写真：労働災害事例を予防に活かすためのポスター（蜂刺傷の予防）

労働災害度数率＝百万延べ実労働時間当りの労災人数 → 本学 0.77 < 全産業 1.83
労働災害強度率＝千延べ実労働時間当りの労災休業延べ日数 → 本学 0.0013 << 全産業 0.11

◇人権及び雇用

学内施設バリアフリー化を進めました。また障害のある学生をボランティアによるノート記録補助や授業中の手話通訳等によりサポートしています。人権侵害を学内からなくすためのハラスメント規程にもとづき、相談窓口を設けて、担当者が相談に応じています。ハラスメント防止委員会の審議対象となったケースは7件ありました。保健環境センターの精神科医による教員対象のメンタルヘルス勉強会を教室単位で開催し始めました。2008年度も継続しています。不登校に関する講演と演劇表現ワークショップを刈谷東高演劇部と共催しました。

◇地域の文化の尊重及び保護等

多くの教職員が、地域の文化の尊重や環境保護の活動に貢献しました。例えば、美術教育講座教員は、刈谷市アクアモール「あたたかい街」（下記コラム）、知立市の野外彫刻プロムナード展、東京国立近代美術館開館30周年記念展への出品（写真）等、地域から国レベルまで貢献をしています。大学の所在地の住民代表と定期的に協議する場を設けています。住民からの要望や意見を真摯に受けとめ、学生に、適正な廃棄物処理方法を示す等の働きかけをしました。



東京国立近代美術館開館30周年記念展出品作
(中島晴美教授の作品。本学所蔵)

◇環境関連以外の情報開示及び社会的コミュニケーション

本学は、環境関連以外の情報も、ホームページや大学の出版物等を通じて積極的に開示し、社会的コミュニケーションを進めるようにしています。ホームページには、「学校教育支援データベース」や地域連携活動を公表しています。地域連携については本学では、地域連携支援室を窓口とし地域からの要望に迅速に対応し、様々な活動の支援を行っています。教育実践総合センターが作成した「学校教育支援データベース」は、幼稚園、保育園、小・中・高校、特別支援学校等に対して、本学教員が支援できる専門領域、対象校種・教科等を公開しています。2007年3月更新のデータベースには、189名の教員が登録しています。2007年度には授業研究指導や研修会等の講演を主に、幼稚園・保育園3件、小学校25件、中学校5件、高校4件、教育委員会その他8件の利用がありました。また、生涯学習・文化・地域課題支援、情報発信・住民サービス支援、国際交流支援に関する地域連携事業として、2007年度には計10件を実施しました。2007年度は、法人文書の情報開示請求が1件ありました。

◇個人情報保護

法規及び本学規程に則り、学生、教職員、その他の大学関係者の個人情報を保護しています。

愛教大生のアートによるまちづくり

●2007刈谷アクアモール・イルミネーション

大学のある刈谷市のJRと名鉄電車が接続する刈谷駅は、一日約6万人の通勤通学客に利用されていますが、夜になると人通りが減ります。2007年12月、駅前商店街を明るく活性化しようと、美術教育講座初等中等美術の1年生約40名が中心となって、「あたたかいまち」をテーマに制作したイルミネーションが、駅北口の遊歩道（アクアモール）に出現しました。あかりの造形「動物たちと妖精の街」「おもちゃの街」の演出には、多くの人たちが行き交う場所にしたいとの学生たちの思いが込められ、多数の市民の目を楽しませました。2008年冬の準備も進めています。



刈谷市アクアモール「あたたかい街」
(宇納一公教授が協力)

●知立市の造形活動

2000年から知立市の街中に学生や卒業生による造形展やワークショップなどを続けてきました。第9回パティオ池鯉鮒野外彫刻プロムナード展では、町の中に彫刻作品を入れていく機会をいただきました。勤めながら睡眠時間を削って制作時間を作り、ブロンズ像を完成させて、静岡から駆けつけてくる卒業生たちの紹介を兼ね、街の中が明るくなって市民の憩いの場となるように、わかりやすい作品を置くことができました。宇納一公美術教育講座教授は、「いつも試行錯誤しながらですが、環境整備の一助になればと、今後も造形活動を通して環境にやさしいまちづくりのお手伝いをしたい」と話しています。